

女子教育に関する一つの考察（第三報）

— 平安朝の行事と教育 —

岡 ヤス子

（家庭科教育研究室）

An Inquiry into The Education For Women.

(The 3rd report)

— The Events and The Education of Heian Pynasty. —

Yasuko. Oka

I 緒言

枕草子「第二段」には「頃は正月・三月・四月・五月・七八九月・十一月、すべてをりにつけつつ一とせながらをかし。」と。

殊に美しい自然に恵まれた都は四季折々の変化に富み、平安貴族はこの自然現象の変化を敏感に感じとり、その美しさを賞し讃える心は行事特に年中行事の母体となった。

行事においては、詩歌管絃に夜の更けるを忘れ、その有様の多くは華麗にして幽雅であり、貴族は行事に参加することによって種々の学芸を発展させるとともに、貴族らしい品格を養い、貴族らしい心遣い、さらには、独特の風格や気品を養う結果となり、さらに志をたて、明日への心ぐみをたてる結果になったと考えられる。

女性も行事への参加によって自然をよく視、よく聞いて「もののあわれ」を感じ味わうとともに、わが心をよく見取り、よく聞き入る態度をも養い、さらに自己の立場を認識し、社会的責任と反省を促がし、人間形成上に役立たせることができたと考える。また、行事の内容により女子の教養として求められた技芸の上達を推進することにもなったであらうと考える。今回は平安期の行事のうち、当代の日記・随筆・物語などにあらわれた諸行事を中心に考察したので報告する。（紙面の都合上その一部にとどま

ることをご了承いただきたい。）

II 行事について

奈良朝から平安朝にかけての年中行事に関しては、文学作品のほか多くの書物⁽¹⁾が続出した。行事には季節を中心とした恒例の年中行事と臨時の行事があり、また、行事の中心が宮廷であるものと家庭である行事、貴族階層のみで行なわれた行事と貴賤の別なく幅広く行なわれた行事、中国の行事を伝承したものと日本古来の行事、生産を制約した自然条件を考慮に入れて行なわれたものが、貴族社会や宮廷において行なわれるようになった行事、さらに仏教行事として行なわれたものなど多種多様の行事が考えられる。しかし、多くの行事は、時代の進行とともに季節を離れ、全般的に形式化、私的化の傾向が強くみられるようになったと藤木邦彦氏は述べている。⁽²⁾

1. 年中行事と考察

枕草子「十段」に年中行事としての節供をあげ「正月一日、三月三日はいとうららかなる。五月五日はくもりくらしたる。云々」と季節美を描いているが、年中行事をこれらの節供などを中心に教育的見地から考察したい。

柳田国男氏によれば「節供を五節供と定めたのは古いことではなく江戸時代の初期で、この日は必ず上長の家に祝賀に行くものと定め、五

節供の制度は厳粛に行なわれた」という。「惰け者の節供働き」のことばの出たゆえんである。さらに、「元来節供の“供”は供するものすなわち食物ということである。人が共に同じ飲食を、同じ場においてたまわることを含んでいた。目的は必ずしも腹一杯食べて楽しむというようなことではなく、同じ単位の飲食物たとえば一つの麴に醸した酒を、一つのこしきで蒸した強飯を、一つの臼の餅や一畝の瓜・大根を分けて双方の腹中に入れることは、そこに眼にみえぬ力の連鎖、連体感を作るという信仰が根本にあった」と述べている。⁽³⁾平安朝における節供(行事)でも特別な料理をつくり、飲食を共にしたことが伺えるのである。

一 月

① 供若菜(わか菜をぐらす)

^{くさ}七種祝ともいう。正月七日この日七種の若菜を調じて食すれば、邪気を払い、万病を除くといわれ、千歳の齡を延ぶと祝うのである。中国古来の慣しが伝来して、宮中行事にも取り入れられたものと推定されている。のちには粥に入れるようになった。白雪の中より摘み出した芹、なづな、ごぎょう、はこべら、仏の座、すずな、すずしろ(異説もある)の青々とした若菜は、早春の生々とした季節感を与えたものであらう。

枕草子「一三一段」に「七日の日の若菜を六日、人の持て来、さわぎとり散らしなどするに、見も知らぬ草を、子どもとり持て来たるを“なにとかこれをばいふ”と問へば、とみにもいはず“いざ”など、これかれ見あはせて“耳無草となんいふ”」とある。多くの人々が、喜々として自然に接し、摘み取った若菜を食す時おのづと生気を感じたであらうと思うのである。この日の行事は、次第に子日宴に融合されて消滅した。

② 十五日粥(望粥の節供)

民間行事が宮中にもとり入れられた行事で、一月十五日に「かゆ」をつくって食す望粥の節供である。粥をかき廻した木を粥杖といい、これで子供をもたぬ女房の尻を打てば、子を妊むというのである。本来この行事の前提になったのは、年占の一種としての粥占であって、粥の中に月の数だけ細い竹管をたて、その中に入った粥の量により、また「ぬるで」その他の木の棒の先端を割って粥の中に入れ、これについての粥粒の多少で豊作の工合を占うのであった。杖でみもりを占うことから、女の尻を叩けばよく妊むといつたのであって、一門の繁栄を祈念しての行事といえる。枕草子「三段」に「十五日、節供まるとりすゑ、かゆの木ひきかくして、家の御達・女房などのうかがうを、うたれじと用意して、つねにうしろを心づかひしたる、けしきもいとをかしきに、いかにしたるにかあらん、うちあてたるは、いみじう興ありて、うちわらひたるはいとはえばえし、ねたしとおもひたるもことわりなり。」と。明るくユーモラスな中に女性の責務を促し、柔和なうちにも機転のきく女性をよしとした行事であったかと思える。

③ 子日宴(小松曳)

正月初子の日、丘に登り、四方を望むと生気あふれて、煩惱を除き、千歳の齡を延すとした。日頃外出することの稀な貴族女性も野外で自然に接し、若菜を摘む風習があった。宇多天皇の寛平年間からは、北野、紫野などに野遊びに出かけるようにもなった。

土佐日記に「む月になれば“京の子の日”の事いひいで、小松もがなといへど、海中なればかたしかし、ある女のかきていたせる “おぼつかな けふは子の日か 海士なれば 海松を

だに ひかましものを」¹¹とある。平安女性の心を開くに役立った優雅な行事といえよう。

二月

積奠

二月と八月の上丁の日（差支えあるときは中丁の日）大学寮において、孔子並びにその門人十哲を祀る儀式である。行事としては、読経、講説、問答または、文章博士が賦詩などを行なう。後、宴が催された。当時女子は大学寮において教育を受けることは許されなかったが、教育の祖を祀り、敬虔な気持をささげたことは、女子教育上にも意義のあったことと考える。

三月

上巳の節供（ひいな遊び）

桜井秀氏によれば「平安朝から室町時代までは三月ばかりでなく、種々の場合に雛遊びは行なわれた。元来雛と三月には特別の関係はなく、少年少女の遊具として用いられた」と説いている。すなわち、後世の雛祭りの源流として、ひいな遊びがあったというのである。

源氏物語「若紫」の巻に、夜一夜風が吹き、霰の散る冬の夜、源氏は「おもしろい絵などもたくさんありますし、雛遊びなどもしましょう」と若紫を誘っている。同じ「紅葉賀」の巻に、紫上のことを記して、「いつしかひるなをしすへてそつき居たまへり。又ちいさき屋などもつくりあつめて奉給へるを所せきまであそびひろげ給へり」と。これは追儺の日のことである。このほか、雛遊びのことを同物語には、八月の頃にもとりあげている。

蜻蛉日記「上巻」に「年かえり（天曆十年）三月ばかりにもなりぬ。桃の花などやとりもうけたりけん。まつにみえず。いま一方もれいはたちさらぬ心ちに、今日ぞみえぬ。さて四日のつとめてぞみなみえたる。」と、三月三日の節供

のために桃の花や酒肴などを準備したことはみられるが雛にはふれていない。また、同じ「下巻」に「^{かとり}練の雛衣三つ縫いたり」すなわち、薄くこまやかに織った絹で雛人形に着せる衣装を縫ったことがみえているが、雛祭りの為というのではなく、いづれも三月三日の節供を特に雛祭りとした風習はまだ定っていないことをあらわしている。

宇津保物語の諸巻でも、雛を少年少女の用いた普通の遊具としている。山科言継卿記には、雛遊びのことが六月十四日、十月二十三日、十一月二十三日の条にみえている。

しかし、雛人形は元來子供の遊具としてではなく、人間の形をした「かたしろ」護人形で、木・藁または紙でつくり、これで自分の体を撫でて身の禍や穢を移し、川や海に流すことによって自身の厄を流す、みそぎ抜いの意味から始められた「ひな流し」の行事に用いられたのが始まりであると考えられている。

源氏物語「須磨の巻」には、三月上巳の日の抜いにことごとしき人形を水に流したことがみえる。

雛を水に流すことは、先に述べた如く自分の身の禍を流すとともに「目に見えぬ精霊を一日も早く退きさせようとする目的であったかと思う」と柳田国男氏は述べている。⁽⁵⁾さらに雛流しについて考えられることは、平安期においては特に「死穢にふれる」ことと共に、老醜を極度に忌みきらったことから、古びた雛を流れにはなして、人形のふるさとへ帰し、新しく美しい姿で再び帰って来ることを願ったのではないかと考える。この雛流しは源氏物語にもある如く三月上巳の日（後には三月三日）に多く行なわれたのは、中国では三月上巳は悪日であるとして深斎を行なったという。わが国でも同様の考えの

もとにこの日、目に見えぬ悪霊や禍を退去させることが目的であったと思うのである。

三月上巳の雛流しと少女少女特に少女の雛遊びが結合して、後世の雛祭りとなったと藤木邦彦氏は述べている。⁽⁶⁾

次に雛祭りの行事はいつ頃から始められたかについて、江戸中期の浮世草紙の作者、上田秋成氏の「雛祭詞」には「ひいな遊び昔は(中略)いつとはなき御ながさみ、たが家の風よりや祭りそめけん(中略)時はやよひの三日四日の空のけしきいとどのけき頃のおそびなりけり」とあり、室町時代から江戸時代初期には一応整っていたと考えられる。

要するに雛は平安期には「美しくあること」「柔和であること」を女子教育の第一の理想としたので、親の願いのこめられた、衣装の着脱もできる美しい遊具であったといえるであろう。従って、子供の美しさを雛にたとえている事例も多くみられる。源氏物語に「いみじうつくしう、ひいなをやうにて、かたたこなたにまざれあるかせ給ふ」と後の後一条天皇の中宮威子の幼時の様を述べている。栄花物語「御裳ぎ」にも「宮(禎子内親王)を見奉らせ給ふに、いみじくうつくしげに、御髪みかみの懸りたる程(中略)これは雛とも絵とも見えさせ給ふものから、らうたげにうつくしうなまめかしう匂はせ給へば云々」と。また同じ巻に「雛人形のご夫婦のようでどんなにかお美しういらっしやるでしよう」と表現したことばがある。その他の文献にも「雛などに似させ給へる」との記述を随所にみることができる。

平安期における三月上巳の日の行事は上述の雛流しと共に「いそ遊び」「いそまつり」とて家族揃って、食事を提え、水辺で禊をし、遊宴をはった風が伝えられている。悪霊を早く追い

出したい日、家の中にじつとしているより外に出て暮し、身を潔めるということからと考える。

この日草餅を食べ、白酒を用いることは、雛とは関係なく古くから行なわれていたようであるが、草餅に用いる「ヨモギ」は、その香りから禊の料として選ばれたのであろう。

三月三日には、また、「曲水の宴」が宮中行事として行なわれた。曲水の宴は、文人・貴族を召して、当日、帝の御前で詩をつくり、講ぜられ、御溝水みかわみづに盃を浮べたことが「康保の御記」に見える。庭の中に清い流れを稲妻型の曲線に流し、人々は流れの両岸に座して、詩歌を作り、上流から流れてくる盃を詩歌のできた御人から順に呑みほすという優雅な行事であった。筆者は昭和46年山口県都濃郡鹿野町にある臨濟宗漢陽寺を訪れた。

同寺本堂前には、平安様式と称せられる曲水の石庭がある。遣水の傍に静かにたつ時、その昔の優雅な様が偲ばれ、感慨一入であった。

さらに、ここ数年三月中旬太宰府天満宮の遣水において、平安の古式に則り神官による曲水の宴の行なわれたことが報道されている。

なお、流し雛の行事は、中国地方においても、広島県大竹市の小瀬川をはじめ、鳥取市などで今も床しく行なわれている。棧俵に雄雛雌雛を乗せ、桃や菜の花を添えて清流に流し、子供の健康と幸福を祈念する行事としている。

四月

賀茂祭

中西の日また、下西の日に行なわれたが、古く欽明天皇の御代に起源するといわれる。賀茂社は平安朝に入り、京都の産土神として朝野の崇敬は格別であった。たんに祭りといえば賀茂祭をいう程で、当日は近衛の中將が勅使にたち、その行列は壯觀目を奪うに足るもので、上は上皇・

女院から、下は匹夫・野人に至るまで京中の貴賤男女は先を競って集り行列を見物した。行列の順路にあたっては、両側に棧敷を構え、美しい物見車は路上にみちて、容易に往来できず、車争いのあったこと、当日の貴族男女の装いの華麗であったことなどについては、源氏物語、枕草子、栄花物語などに記されているところである。上下公私共に葵の鬘をつけ、車にも葵をかざしたので「葵祭」とも称した。栄花物語「布引の滝」に「二宮の五つにおはしましゝに祭の棧敷にて物御覽せし御有様のめでたさに云々と、堀河院の二宮善仁親王の祭見物について述べている。

蜻蛉日記上巻「葵のまつり」に、「このごろ四月、祭見にいでたれば、かのところにもいでたりけり。さなめりとみて、むかひにたちぬ。まつほどのさうざうしければ、橘の実などあるに、葵かけて、

“あふひとかきけどん(も)よそにたちばなの”といひやる。ややひさしうありて、

“きみがつらさをけふこそはみれ”とぞある」と。祭の見物の日には久々に会う人もあり、平素の様々の感情を表現する機会ともなったことが伺える。枕草子「二一九段」に「見ものは臨時の祭。行幸。祭のかへき。御賀茂詣」とある。貴族女性の数少ない外出の機会のうちでも特に巍然とした態度で、多くの人にまみえて貴族女性の権威を示すとともに、自己の見聞をひろめ経験を豊かになし得た点などから、期待と関心の深い行事であったといえるであろう。

五月

端午の節供(五月五日)

この節供は、節供の中でも最も盛大であった。元来、民間行事であったものが、宇多天皇寛平年間より宮中でも行なわれる行事となり、当日

宮中主殿寮の官人が諸殿舎の軒に菖蒲を葺いた。後宮女性にとってもゆかしい行事であったが、その他貴賤一般の行事としても行なわれた。新緑の美しいさわやかな季節、軒に菖蒲を葺き、時にはこれを集めて枕とし、また浴湯に入れ、酒に和して飲む。

軒に菖蒲を葺いたことに関する記述を文学書について見よう。

枕草子「八十九段」に「いとあたらしからず、いたうものふりぬ椀皮葺の屋に、ながき菖蒲をうるはしうふきわたしたる。」さらに、「せちは五月にしくはなし、さうぶよもぎなどのかをり合いたるも、いみじうをかし。九重の内をはじめて、いひ知らぬ民の住家までいかでわがもとにしげく葺かんと、思ひ騒ぎて葺きわたしたる、なほいと様ことにめづらし。」。宇津保物語「祭の使」の条に「五月五日つとめて(菖蒲の)長く白き根を(添えて)侍従の君、聞え給ふ」。

菖蒲は今日の「しょうぶ」で根の白く長いものは4、5尺にも及び、長命を希うしるしとした。

蜻蛉日記「中巻」に「五月にもなりぬ(中略)“世の中にある我身かは、わびぬれば さらにあやめも しられざりけり”」(希望を失って何が何だかわからぬ我が身には、あやめを葺いて邪を避けることもいらないようだ)。栄花物語「たまのむらぎく」に「はかなく五月五日になりぬれば、大宮(上東門院)より姫君(禎子内親王)にとて薬玉奉らせ給へり」。それに歌を添えて

“底深く引けど 絶えせぬ菖蒲草

千年を松の 根にやくらべん”

また、同書「とりのまひ」に「かくて五月にもなりぬれば例の殿の卅講とて、いそがせ給。五月五日童への薬玉付けたるを御覧じて、内大臣殿、御匣殿、”年ごとの あやめの草にひきか

へて 涙のかゝるわが袂かな」(今年も母もなくなり、あやめや薬玉をみるにつけても悲しさに堪えず、涙のふりかゝるわが袂よ)とある。

芝葛盛氏によれば、⁽⁷⁾菖蒲は四日に葺いて用意した。賀取りをした家、新造家屋は三ヶ年間菖蒲を葺かない習慣もあつたというが、一般には葺くことを本体とした。(不吉のあつた家は葺かなかつた。)以上の如く菖蒲を葺くと共に薬玉の贈答のあつたことも知られる。この日贈られた薬玉は、屋内の柱や簾にかけて、邪気を払い、無病息災を祈念したのである。この日の行事の起源は、中国では五月を悪月として難をさけるために行なつたが、わが国もこれになつたものと思われる。

宇津保物語「祭の巻」に「正頼邸において、貴族や美しく着飾つた女君達が集い、舞踏し、男君たちは競馬・騎馬・騎射、打毬の行事を行なつた」。また同「ただこそその巻」には五月五日になりて節供など、いとけらに調じて「おとゞや物し給ふ」とて例の「云々」(大そうなご馳走を見事に調理せられた)とある。蜻蛉日記「あやめの節会」に「五月五日に競馬が行なわれ、章明親王や兼家が棧敷をすばらしく装飾してそこから見物した。」ことを述べている。

菖蒲を葺き、薬玉を贈る情緒豊かな行事と競馬、騎射などの行なわれたことは全く趣を異にするようであるが、何れも邪気を追い払うことに起因していると考えられるのである。

さらに、この日山野に葦草を競いとつたといわれているが、和歌森太郎氏の説⁽⁸⁾によれば、「五月はサツキであり、サ(田)の神の祭を行なう月、すなわち、田植えすべき月であるから、田植えにかかる前に早乙女たちが忌みこもりをして、神聖な心身で田植えに臨んだのである。この忌みこもりの小屋の屋根に菖蒲を葺いたこ

とが、五月の節供に菖蒲を葺くことのはじまりであると考えられる」と説いている。この説によれば五月五日の節供は女の節供であつたといえるようであるが、菖蒲の音が「尚武」に通じ、武家社会以後男子の節供とせられるようになった。

薬玉は元慶七年(883年)頃から用いられたといい、麝香、沈香などの薬を玉にして錦の袋に入れて五色の糸を結び下げ、いろいろの花で飾つたものであるが、宮廷でも五日の節会のあと、宴があり皇族および臣下に薬玉を賜つた。しかし、のちこのことは絶えたという。薬玉は当代人の情趣にふさわしく、限りなくゆかしいものとして扱われたと考えられる。柱に飾つた薬玉は、九月の重陽の節供までおき、その日取り払うのである。

栄花物語「かがやく藤壺」に「長保二年五月五日になりぬれば人々さうふあふちなどのからぎぬ、うはぎなども、をかし」とあるが、衣服の色にまで菖蒲の色を用いたことは、平安女性の季節感の教育を表徴しているといえよう。

この日粽を食することも既にこの時代の初期に行なわれはじめたと考えられている。

粽の起源は「昔高辛氏の悪子五月五日に舟のりて海を渡りし時、暴風俄かにふきて浪に沈みけるが、水神となりて常に人を悩ます。故にある人五色の糸で粽を結んで海中に投じたところ五色の竜となり、それ以後は海神も人を悩まさず、舟も災難を免れたという伝説がある」と、桜井秀氏は述べている。⁽⁹⁾

七月

七夕(乞巧奠)

七日、索牛、織女の二星が天の川で相会う夜、香花を供え、竿の端に五色の糸をかけ、一事を願えば、三年のうちに必ず叶えられるといわれ

た。特に織女の名にちなみ、女子が機織る技をはじめ裁縫の上達を祈り、後には書道、音楽などの上達をも祈ったので、七夕を乞巧奠ともいい、唐の乞巧奠の儀がわが国に伝えられたという。何事にも優美さを求めた当代貴族たちは、ロマンチックな故事にならぬ、恋愛の成就を祈る風も生まれたと伝えられている。

待賢門院堀川集に「七月七日梶の葉にかく、
"たなばたに 物思ふこと かきたらば、
げには心も なぐさみなまし。"とある。

この行事は、奈良朝から平安朝に入って盛んとなり、平安中期よりは、宮廷で清涼殿の東庭に葉薦をしき、御燈明を供して二星の会合のさまを仰ぎつつ、終夜管絃や詩作がつけられた。星まつりに関する平安期における記述は多い。更級日記「七月七日に」の中に「世の中に長恨歌といふ文を物語りにかきてある所あんなりと聞くに、いみじくゆかしけれど、えいよらぬに、さるべきたよりをたづねて、七月七日にいひやる。

"ちざりけむ 昔の今日のゆかしさに
あまの河浪 うち出でつるかな"
返し

"たち出づる 天の河辺のゆかしさに
常はゆゝしき ことも忘れぬ。"
(七日には長恨歌にある玄宗皇帝と楊貴妃の故事を思い、また、索牛・織女の天河原での会合の様を考え、歌に詠んでいるのである。) 源氏物語「幻の巻」、源氏が亡き紫上を偲ぶ条に「七月七日も例にかはりたること多く、御あそびもし給はで、つれづれにながめ暮し給ひて、星合見る人もなし。」

宇津保物語「藤原の君の巻」に、正頼一家が賀茂川に遊ぶことを記して「七月七日になりぬ、賀茂川に御髪すましに大宮より始め奉りて、小

君たちまで出で給へり(中略)その日の節供、川原にまるれり。君達御髪すまして、御琴しらべて七夕に奉り給ふほどに云々」と。

和歌森太郎氏の説によれば、「民族的に星の伝説については無知であったと考えられる。要するにこの日は来るべき十五日の盂蘭盆会の前提となる墓掃除の日、盆道作りの日および、そのために身を潔める日であって、川に入って禊をするのは、かなり普遍的な七夕行事になっていた。星祭りとしての七夕は、全く、文人の知識にもとづく実生活から遊離した観念的行事であったというべきである」という。

柳田国男氏も同様に、「七夕という日に二星が相会するなどという話は、書物を読んだ人が知っている程度で、一般庶民の年中行事は近世まで無関係に行なわれた。すなわち、七日の行事は和歌森氏の述べる内容のほか、同じ立場から、井戸替え、蟲払いを行ない、また、この日の水で洗うと汚れがよく落ちるといって、女達は必ず流れで髪を洗った。七夕送り」と称して色々好ましからぬものを家から送り出し、盆を清らかな日にしようとしたことは、正月前の煤払いに似ている」と述べている。

災禍、害悪は適切な時と方法をもって対処すれば避けられるという信仰をもっていたものと考えられる。

大宝令の制度では、大学寮・国学のほか陰陽寮を設け、陰陽道・暦学・天文学など学ばしめたので、天文学的知識と共に中国の索牛・織女二星の伝説が伝わり、当代において少なくとも貴族間には語り知られたことは、諸文献に多くの記述のあることから理解できるのである。

依然通婚の結婚形態が多くみられた⁽¹⁰⁾平安期の貴族女性は、年に一度相会うという二星を仰ぎ、わが身の上を思い合わせて、あるいは反省

し、あるいは我身のはかなさをしみじみと味わったものも少なくなかったのではなからうか。

九月

重陽の節供（九月九日）

菊花を賞する節供で、菊の節供ともいう。

この日、天皇は紫宸殿に出御、菊の宴を開き、臣下に菊花酒を賜い、管絃の御遊びとともに内教坊の舞妓の演奏も行なわれた。この日菊酒を飲む風習は元来中国のものであった。

しかし、醍醐天皇の崩御が九月九日であったため、その後廿年間菊の宴は行なわれなかった。

村上天皇天曆四年、九月九日をさけて十月に行なわれ、名も「残菊の宴」と改められたが、儀式は以前に変らなかつた。菊は延寿の効があるとされていたので、八日の夜、真綿を菊の花の上にかぶせ、（菊のきせ綿）菊の香りと露をしみこませて、翌日これを取って身体を拭き、老を去るまじないとした。

平安後期には、九月九日に盛んに行なわれた。紫式部日記に、九日菊の綿を道長の室倫子が道長の老を拭わんと贈ったことを述べている。枕草子「三九段」に「九月九日の菊をあやしき生す絹すじのきぬにつつまてまらせたるを、おなじはしらにゆひつけて、月頃ある薬玉とときかへてぞ棄つめる」との所見がみえる。

大鏡には「また、かの筑紫にて九月九日、菊の花を御覧じけるついでに、いまだ京におはしましし時、九月のこよひ、内裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らせたまひける詩を帝からうたかしく感じたまひて、御衣賜わりたまへりしを、云々と、太宰府における道真のことを述べている。

この日五月五日の節供にかけた薬玉をとりかえて、左右の御帳くみに茱萸袋をかけることが延喜式にみえる。空行く雲を見やり、馥都たる花の香

りにつつまれて、菊綿にて体を拭い邪気を払って、延命長寿を祈った季節感にみちあふれた行事と考えられる。

十一月

新嘗祭

十一月、中の丑の日五節の舞姫は内裏に参入し、その夜天皇が常寧殿に出御あつて御張台で五節の舞の試舞を御覧になる。帳台の試みという。枕草子「九二段」にも「帳台の夜、行事の藏人のいときびしうもてなして、かいつくろひふたり、童よりほかに、すべて入るまじと戸をおさへて（中略）上もおはしまして、をかしと御覧じおはしますらんかし。」とみえる。四人の舞姫は、玄輝門から参入して、袖を五たび翻して一周し、五周をもって舞い終る。さらに中の寅の日、清涼殿においてふたたび五節の舞の試舞を御覧になるが、これを御前の試みという。この夜清涼殿の東庭にて淵酔ということありて、公卿、殿上人は遊宴のはてに朗詠・今様などをうたい、後宮の廊などで乱舞した。

次いで行なわれる中の卯の日の新嘗祭には、新しい稲を神に祀る。この日清涼殿で童女（舞姫に従う童）御覧の儀がある。翌辰の日には豊明節会が行なわれ収穫を祝って、群臣に饗宴を賜わり、五節の舞が奏せられた。

以上が一連の新嘗祭の行事で平安朝を通じて行なわれた。五節の舞姫に選ばれることは、女性にとってこの上もなき晴の事で、そのための平素の教育はもちろん、貴族は莫大な経費を支出しても競って、その女を舞姫に差出したいと考えた。従って女子の芸能を促進する機会となった行事といえよう。（五節の舞については諸説があるが、天武天皇が吉野に仮住居をなされ、琴を弾かれた折に、前の峯から天女が下りきて、天の羽衣を五たびひるがえして舞ったというこ

とに起源を発しているとも伝えられている。) 民間では、新嘗祭に田の神を迎えて感謝し、饗宴を行なったという。

2. 家庭行事・仏教行事

子供の成長を祝し、その自覚と責任を促すことを中心に家庭で臨時に行なった行事として、産養、髪そぎ、魚はじめ、袴着、元服、著裳、御載餅、露頭、三日餅などの行事があるが、詳細については今回は省略する。

また、仏教行事としては、東大寺法華会(三月)、灌仏会(四月)、清涼殿最勝講(五月)、興福寺長講会(七月)、法成寺念仏会(九月)、法成寺御八講(十一月)、最勝寺灌頂(十二月)その他多くの行事が考えられる。これら宗教行事に参加することにより、常住不変の極楽浄土を欣求しようとする未来観の立場をとらせることとなり、とかく非観的思想をもった平安女性に心のよりどころを与え、またその理想とした「おいらかに、らうらうじき心」を養うに役立ったと考える。

Ⅱ 結 語

今回は一部の行事のみについて述べ、意を尽していないが、時の流れに節をつけ、自然の変化を折目として行なわれた年中行事、家庭生活の中で家族の邪を払って長寿を祝い、また、亡き祖先を追憶崇敬するための行事、幼き者の健全な成長と学芸の発展を念じて近親者の真剣な配慮と計画によって情趣深く行なわれた諸行事への参加は、純真な心をもつ子女達に自分を反省させ、今後のあり方を考えさせる契機となったであらう。そして、その結果は意識的、無意識的に貴族女性としての精神的教養と品格を高めることに役立ち、願望をも達成したものと考えるのである。

註

- (1) 平安前期の行事については内裏式・弘仁儀式・弘仁式など、平安後期の儀式については内裏儀式・新儀式・西宮記・小野宮年中行事・九条年中行事など。
- (2) 藤木邦彦著「平安時代の貴族の生活」(日本歴史新書)
- (3) 柳田国男著「定本柳田国男集第十三巻」
- (4) 両説ありと芝葛盛氏は述べている。
- (5) 柳田国男著「定本柳田国男集第十三巻」
- (6) 藤木邦彦著「平安時代の貴族の生活」
- (7) 芝 葛盛著「平安時代の風俗」(日本風俗史講座)
- (8) 和歌森太郎著「日本風俗史」
- (9) 桜井秀著「風俗史の研究」
- (10) 岡ヤス子「広島文化女子短期大学紀要第6号」

参考文献

- 枕草子・紫式部日記；日本古典文学大系
 蜻蛉日記， 全 上
 土佐日記， 全 上
 宇津保物語， 全 上
 源氏物語， 全 上
 栄花物語， 全 上
 大鏡， 全 上
 更級日記， 全 上
 日本風俗史 和歌森太郎著
 風俗史の研究 桜井 秀著
 定本柳田国男集 柳田国男著
 平安時代の貴族の生活 藤木邦彦著
 平安時代の風俗 芝 葛盛著
 女子教育史 志賀 匡著
 日本女性史(上) 井上 清著
 日本教育精神史 佐藤清太著
 平安朝の生活と文学 池田亀鑑著

Summary

The metropolis was endowed with natural beauty changing in a season after another. The nobles of Heian Dynasty keenly felt the beauty, which was the source of their annual events. In the enjoyment of poetry and orchestral music, they often forgot the time till late at night. The events were so gorgeous and elegant that they learned various accomplishments by taking part in them and finally acquired the generous and graceful character befitting the nobility.

The women, too, by joining the events naturally came to have broader outlook including *mono no aware* (subtle sensitivity to changeable nature), introspection, recognition of their standpoint and social responsibility. Thus their character as human beings was formed. I think the feminine arts and handicrafts were also encouraged and advanced as they were necessary for women in some events.

Among others, I examined *Hiina asobi* (Playing with dolls), *Tango no sekku* (the Boys' Festival), *Tanabata* (the Festival of the Weaver), and *Choyo no sekku* (the Chrysanthemum Festival), appeared in the literature of Heian Dynasty, placing emphasis on their origins, contents, and objectives.